

リカバリーサポート・ネットワークが初のフォーラム

ホール、司法書士、精神科医らが「パチンコ依存問題を語る」

パチンコ依存問題解決のために毎日遊連が設立した第三者機関「ぱちんこ依存問題相談機関リカバリーサポート・ネットワーク」(略称RSN)、西村直之代表、沖縄県中頭郡西原町は8月19日(土)午前10時から、東京・京急蒲田駅前の「大田区産業プラザ」で「第1回ぱちんこ依存問題を考えるフォーラム～それぞれの立場から～」を開催。回復施設「NPO法人ワンデーポート」が共催。強迫的ギャンブラーの家族ら一般120人、関係者含めて合計170人が、パチンコ依存問題の回復支援に携わる現場担当者それぞれの立場からの声を熱心に聞き入った。

フォーラムは午前中がRSNとワンデーポートの活動紹介やワンデーポート利用者の体験談の発表だが、これまでマスコミの前で体験談が語られた例はないとのこと。主催者の希望で体験談の取材はかなわなかつた。

午後から始まつたシンポジウムで、全日遊連ぱちんこ依存問題研究会委員の力武一郎氏(大分県遊協理事)はRSNのポスター(全日遊連作製)を貼つたり、負けがこんだお客様へ声かけ運動など、自らパチンコ依存問題についておこなってきた活動を説明。

そして「ぼくは相互理解の一言だと思っている。これからもこのボスターを1軒でも多くのホールに貼つてもう活動を続けていて、今経営者側が非常に困難な時期にある中で1万軒を切るぐらいの数になり、過半数のホールがボ

大限必要だと思う。それともうひとつ、本格的に債務整理をするのはいつなのかということだ」と強調。

つまり、家族と離れてワンデーポートに入りリハビリをおこない、社会に復帰してしばらくしてそろ落ち着いてきたころに債務整理をやるのが、一番良い方法だという。さらにワンデーポート7年

スターを貼つてくれるような状態になった時に、初めてパチンコ店が世間に認知されるような業界になるんじやないかと思つていて。自分ができることをやつていこうというのがぼくの依存問題への基本的なスタンス。これからも一生懸命やっていきたい」と述べた。

司法書士として17年ほど多重債務、債務整理に関わってきたワンデーポート理事長の稻村厚氏は「パチンコの問題、ギャンブルの問題を抱えるとほぼ100パーセントの方が多重債務に陥り、家族も含め借金の問題としてとらえる。その相談窓口(弁護士や司法書士)がこの(依存)問題にまったく理解がないと、家族のかたが何度も尻拭いをするという悪循環が避けられない。まず第一にわれわれがやらなきやいけないのは、相談窓口としてその人の債務の根本問題は何なのか見抜ける力、これが最

左から安高氏(RSN)、力武氏(全日遊連)、稻村氏・伊波氏・中村氏(ワンデーポート)



安高
力武
稻村
伊波
中村

間の経験から、①強迫的ギャンブラーは普通の人である②強迫的ギャンブラーはギャンブルをすることに罪悪感を持っている——といふ2点を指摘した。

パチンコ依存という大きな力に捕まつてコントロールされていたワンデーポートのギャンブル家族教育セミナー講師の伊波真理雄氏(精神科医、精神保健指定医)は「医療に預けても治る病気じゃない」という立場。

「本人たちが一番苦しいのは、人生が思わず方向に行つてしまい大きな迷惑を人にかけた。こういう状況から回復しなければいけない。パチンコ依存という大きな力に捕まつて、自由な人間のつもりだつたかもしれないが、あなたの自身がコントロールされていた。あなたに罪はないんだと気付けるようになら、そこを出たあとも(仲間の)優しい目に遇まれるようしばらく家族の元には戻らない。自分たちは人の役に立つこともできるし、思いやりを持つたまともな人間だと、そういうことをちゃんと回復してから、戻りなければ、社会に戻つてほしい」と理論を展開した。

パチンコ店の功罪については「ご家庭のかたの相談を受けている」と、パチンコ屋さんなんかなくなりてしまえばいいと言うかたが少なくからずいるが、割と高齢者の方たとか、たぶん山村部にひとりで住んでる高齢者のかたで、パチンコ屋さんにも行かなければ私は朝から誰とも一言も喋れないといふかたもいる」と、パチンコ依存問題とは逆な一面も紹介した。

なお、会場では警察庁生活環境課の辻義之課長、小堀龍一郎課長補佐ら担当官3人も全日遊連の西俊文事務局長と並んで耳を傾け、関心の高さをうかがわせていた。